NOGUCHI, Y., OKABE, H., NOGUCHI, M., KONDO, H.,
WADA, H., and YAMAZAKI, T.
A Study of Personality Traits of College Athletes.

運動選手の性格特性についての研究

九州大学   野口 義之   岡部 弘道   野口 博敏
福岡学芸大学   近 藤   衛
久留米大学   和 田   寿
西南大学   山 崎   剛

体格(型)と性格の関係, 運動能力や運動の経験と性格の関係については, Kretschmer¹⁾, Heath²⁾, Woods³⁾, Seltzer³⁾, Downey⁴⁾, Doust⁵⁾, Sheldon⁶⁾, Johnson⁷⁾, Staton⁸⁾, Biddulph⁹⁾, La Place¹⁰⁾, Weber¹¹⁾, 松田¹²⁾ 著者¹³⁾等の研究にみられるが, 性格評価の方法は夫々異つてゐる。一般に性格研究の方法には, 観察法, 内省法, 評定法, 作業法, プロゼクト法¹⁴⁾等があるが, 最近は特にプロゼクト法が重要視されてきたようである。しかしながら色々の欠陥はあるにしても(Fiske¹⁶⁾) 内省法(自己診断法)は実用的見地から簡便であり, 直接的であるという特徴を持つてゐると思う。1954年京都大学の矢田部教授¹⁵⁾のところでGuilford-Martinの三つのInventory 即ちSTDCR, GAMIN 及び Personnel Inventory を使用して所謂「特性別自己診断検査」(YG I, II)が作製され, YG II は更に改訂されつゝある。

この検査はGP分析による項目分析が行はれてテストの内的整合性が吟味され, 各特性間の独立性も検討されてゐて而も其の信頼度も相当高いと言はれてゐる。この検査は, 160項目からなるもので一項目を約6秒の速度で読みきかせ, 別に用意した answer sheet に記入させるといふ方法をとつてゐる。

人間の性格はこのような自己診断検査のみ

では十分明らかにすることは出来ないもので, 作業法やプロゼクト法等を併用し, 色々の方向からの資料を集め総合的評価をすることが大切である。而しこの総合評価も臨床心理学的に個人の診断には容易であるが集団としての性格を評価する場合には, そう簡単に実施出来るものではない。

著者¹³⁾はかつて女子運動選手の向性と性度 masculinity-femininity を調査し, 一般女子学生との違いを明らかにしたが, このように特殊な集団に所属する人々は其のFrame of Reference が特殊化する。スポーツマンは特殊な性格を持つてゐると言はれるが, 自己診断検査によつて其の特殊性はどのように表はれるものであろうか。

1. 目 的

運動部に所属したことのある学生と, 全く所属したことのない学生(以後一般学生と呼ぶ)に「特性別自己診断検査」(YG II)を実施して, 両者の違いを明らかにするとともに運動経験年数別に又スポーツの種目別に彼等の性格特性がどのように変容しているかをみようとする。ここでは特性別の partial variance をながめるが, 因子構造上の違いについては別の機会に発表する予定である。

2. 方法及び被験者

被験者を, (1)一般学生として九州大学教養

被験者の内訳は次の通りである。

- 要するに運動部学生は、一般学生に比べて社会的外向、思考的外向、抑うつ性が少く、

第1表 平均値及標準偏差

		S	T	D	E	R	G	L	M	I	N	P	A	F
運動部員 528	M	11.1	12.1	10.8	11.5	13.0	15.1	12.7	9.2	10.2	10.5	9.6	14.2	13.2
	σ	5.37	4.80	5.76	5.37	5.06	4.92	5.45	5.23	5.62	6.00	4.80	4.01	4.91
一般学生 (九州大学) 72	M	14.8	9.2	14.6	12.4	9.7	10.0	15.8	10.3	12.8	14.5	10.4	12.3	13.5
	σ	6.34	4.54	6.22	5.71	5.19	5.26	5.76	4.11	5.43	6.00	5.50	3.86	5.13
一般学生 (京都大学) 150	M	11.1	8.7	11.5	11.2	10.5	12.7	10.2	8.0	9.8	12.0	9.5	13.1	9.7
	σ	6.80	4.92	7.46	6.06	5.12	6.40	6.72	3.56	6.60	6.50	4.80	4.78	4.84
非行少年 (奈良) 133	M	12.6	9.6	13.5	14.1	13.1	15.6	12.6	11.2	13.6	13.2	14.0	15.3	13.7
	σ	6.12	4.98	5.42	5.16	5.62	5.68	6.18	3.54	6.16	6.10	5.50	4.46	4.62

第2表 平均値の差の有意性

	(A) 運動部	(B) 一般学生	A - B	t ₀	P (%)
S	11.1	14.8	-3.7	4.68	0.1
T	12.1	9.2	2.9	5.00	0.1
D	10.8	14.6	-3.8	4.87	0.1
E	11.5	12.8	-1.3	1.83	none
R	13.0	9.7	3.3	5.08	0.1
G	15.1	10.0	5.1	7.85	0.1
L	12.7	15.8	-3.1	4.31	0.1
M	9.2	10.3	-1.1	2.08	5
I	10.2	12.8	-2.6	3.77	0.1
N	10.5	14.5	-4.0	5.33	0.1
P	9.6	10.4	-0.8	1.78	none
A	14.2	12.3	1.9	3.88	0.1
F	13.2	13.5	-0.3	.47	none

のんきであり、一般的活動性にすぐれ、社会的指導性に富み、男性的であり、劣等感が少く、又神経質でなく攻撃的であるということが出来る。この事は一般に外向的であるとも言えるであろう。

運動の経験と性格形成の問題 即ち運動選手の持つ特殊な性格については、運動を始める前にそのような性格を持っていたのではないが、或はこのような性格を持っていた者がスポーツを好きになり運動選手になつていてのではないかと言はれたりした。性格形成の機序は素質と環境が相互に働き合つてなされるもので両者を二者択一のかたちではとうてい証明出来ない。

我々はこの両者の interaction を少しでも明らかにするために、経験年数別にグルーピングして特性別の平均値を出してみた。これ

が第3表である。運動の経験が1～2年の者と9～10年の者との差をt検定すると第4表の通りである。即ちTEPF特性を除いた他の特性には有意な差が認められた。そこで有意な差の認められた特性は、運動の経験によつて少からず変容されていると言えるであろう。

而して乍ら、この結果を直に、運動の経験のみがしからしめたとするわけにはいかない。何となれば、運動経験年数別のグルーピングは、各種学校別には考慮されていないので、例へば1～2年の経験者の中には、或る者は中学時代であり、又他の者は高校或は大学時代の経験者も含まれているからである。なを更に大切なことは、運動部以外の生活環境の力を無視するわけにはいかないからでもある。要するにこの間の事情を明らかにするためには、どうしても同一被験者の追求調査 (follow-

第 3 表 平均値及標準偏差 (経験年数別)

経験年数	特性	S	T	D	E	R	G	L	M	I	N	P	A	F
9 ~ 10年 62	M	9.9	11.9	9.6	11.3	14.0	18.0	10.8	8.7	9.0	9.6	9.0	15.1	12.7
	σ	4.28	5.07	5.72	5.11	4.65	3.56	4.59	3.15	4.16	5.79	4.14	3.42	4.87
7 ~ 8年 95	M	11.1	13.1	10.5	10.8	13.3	16.1	12.8	9.5	9.3	9.3	9.7	14.5	12.8
	σ	5.62	5.49	5.54	5.61	4.63	4.79	5.79	3.77	5.11	5.16	4.44	4.27	4.24
5 ~ 6年 126	M	10.2	11.9	10.5	11.0	13.5	15.3	12.2	8.8	9.5	9.9	9.7	14.7	14.7
	σ	5.62	5.03	5.45	5.00	5.16	4.79	5.59	3.35	5.75	6.08	4.70	3.75	5.53
3 ~ 4年 148	M	11.1	11.6	11.5	11.8	13.1	14.3	12.8	9.0	11.0	11.6	9.5	13.9	13.5
	σ	5.41	4.52	5.72	5.46	5.15	4.86	5.29	3.53	5.61	6.07	4.94	4.15	4.94
1 ~ 2年 102	M	12.8	11.6	11.6	11.8	11.3	12.9	14.0	10.2	13.1	11.9	9.9	13.4	14.0
	σ	5.39	4.56	5.92	5.42	5.31	5.46	5.52	3.75	5.46	5.80	5.51	4.22	5.08

第 4 表 平均値の差の有意性

	(A) 中・高・大と 継続した者	(B) 中学だけの者	A - B	t ₀	P (%)
S	10.5	13.4	-2.9	3.12	0.5
T	12.7	10.2	2.5	2.87	0.5
D	10.3	12.4	-2.1	2.04	5
E	11.1	12.9	-1.8	1.86	none
R	13.4	11.7	1.7	1.83	none
G	16.0	12.8	3.2	3.37	0.1
L	11.8	13.9	-2.1	2.21	5
M	9.0	10.2	-1.2	1.79	none
I	9.5	12.8	-3.3	3.11	0.5
N	9.7	15.2	-5.5	5.73	0.1
P	9.6	10.2	- .6	.61	none
A	14.5	12.9	1.6	2.13	5
F	13.3	13.9	- .6	.68	none

第 5 表 平均値及標準偏差 (学校別)

経験した学校	特性	S	T	D	E	R	G	L	M	I	N	P	A	F
中・高・大 227	M	10.5	12.7	10.3	11.1	13.4	16.0	11.8	9.0	9.5	9.7	9.6	14.5	13.3
	σ	5.22	4.47	5.73	4.98	4.72	4.36	5.20	3.47	5.40	6.15	4.34	3.95	5.03
高・大 109	M	11.2	12.5	10.9	11.2	12.8	14.6	12.9	9.3	10.1	9.6	9.4	14.6	13.4
	σ	4.89	4.90	5.70	5.15	5.37	4.34	5.13	3.18	5.85	5.73	4.88	3.84	4.86
中・大 53	M	10.4	10.0	12.1	12.2	13.2	14.6	13.1	9.4	10.8	11.4	10.1	14.7	12.9
	σ	5.56	4.28	5.52	5.38	5.50	4.69	6.21	3.64	5.31	5.31	4.86	3.72	3.59
中・高 31	M	12.5	11.5	10.3	12.5	13.2	13.0	13.6	8.9	10.1	12.3	9.9	13.7	11.7
	σ	6.87	5.22	6.60	5.41	4.89	5.72	5.81	3.26	5.31	6.13	4.87	4.04	4.68
中学のみ 43	M	13.4	10.2	12.4	12.9	11.7	12.8	13.9	10.2	12.8	15.2	10.2	12.9	13.9
	σ	5.93	5.30	6.21	5.91	5.70	5.92	5.78	4.12	6.50	5.63	6.11	4.56	5.28
高校のみ 10	M	13.3	10.4	13.0	11.9	9.7	10.5	14.8	10.2	13.0	13.6	9.4	12.1	12.9
	σ	4.87	5.06	6.59	5.41	4.39	5.67	5.43	4.58	6.20	6.07	5.41	3.42	5.28
大学のみ 55	M	10.9	12.6	10.6	11.1	12.8	14.5	13.3	9.2	9.9	9.5	9.2	13.3	13.5
	σ	5.20	4.34	5.37	5.21	4.31	4.53	4.80	28.6	5.33	4.97	4.74	4.24	5.22

第6表 平均値の差の有意性

	(A) 9~10年部員	(B) 1~2年部員	A-B	t_0	P(%)
S	9.9	12.8	-2.9	3.82	0.1
T	11.9	11.6	0.3	.38	none
D	9.6	11.6	-2.0	2.13	5
E	11.3	11.8	-0.5	.60	none
R	14.0	11.3	2.7	3.18	0.1
G	18.0	12.9	5.1	7.18	0.1
L	10.8	14.0	-3.2	3.95	0.1
M	8.7	10.2	-1.5	2.78	1
I	9.0	13.1	-4.1	5.47	0.1
N	9.6	11.9	-2.3	2.47	25
P	9.0	9.9	-0.9	1.05	none
A	15.1	13.4	1.7	2.79	1
F	12.7	14.0	-1.3	1.61	none

第1図 性格特性のプロフィール
(一般学生と一運動選手の特性)

この選手は、非常に社交的であり、抑うつ性は非常に少く、のんきさ、一般的活動性、社会的指導性は最大値を示し、劣等感は全くなく、現実的であり、神経質でなく、又かなり攻撃的であるという特性を持っている。

ow up) が必要であらう。

次にどの学校で運動を経験したかという事を基準にして組分けして其の特性を第5表に示し、中学校のみの経験者と、中学・高校・大学と継続している者の平均値の差を t 検定

した結果を第6表に示した。

以上の事から推論されることは、運動の経験によつて変りにくい特性は、EPRMFであり、其の他はかなりの変容を示している。

又RM特性は、運動を始める前から既に高い値を示している。換言すれば特性の高い人はスポーツがすきになる傾向があるとも言えるかも知れない。

或る大学で典型的なスポーツマンという風評のある学生について、本検査のプロフィールを書いてみると第1図の通りである。このような事例のあることは著者にとつても実は驚きであつて、personalityに及ぼすスポーツの力が如何に大きいかなづかれるのである。

スポーツの種目別に部員の性格特性をみると第7表の通りであり、スポーツの特性によつて組分けして其の集団の性格特性の平均値は第8表の通りである。この結果、種目別、類型別には著しい差は見出されなかつた。

総 括

1. YG II を大学生に実施して、一般学生と運動部学生の性格特性の違いを比較した。

EPF 特性は両者の間に差が認められなかつたが、其の他の特性には有意な差が見られた。

2. スポーツの経験年数によつて組分けをし

て1～2年集団と9～10年集団の差をみると
TEPF 特性の外は全て有意な差を示した。

3. 中学校に於ける運動部の経験者と、中学
高校・大学と継続した者との間には、ERMPF
特性の外は全て有意な差が認められた。

4. 以上の事から運動部の経験によつてEPF
特性はあまり変容されないが、その他の特性
は少からず変容されるものと思はれる。

5. 特性別にこのような顕著な差が認められ
るので、運動選手の性格の構造は、一般学生
と異つていてのではないかと予想されるが、
この点は今後の問題として残したいと思う。

(最後に、本研究に協力してくれた安武、生
島、田中、大内田、菅原君に謝意を表す次第
である。)

第7表 平均値及標準偏差(種目別)

No.1

種 目	特性	S	T	D	E	R	G	L	M	I	N	P	A	F
バスケット	M	9.5	11.8	12.3	12.1	14.1	16.8	10.9	10.3	11.3	12.1	12.5	16.1	15.4
	σ	5.19	4.83	5.32	4.95	4.10	3.87	4.64	3.17	5.47	5.17	4.71	3.63	2.81
バレー	M	10.3	11.2	10.9	10.0	12.3	12.3	15.2	8.8	9.0	9.7	8.7	14.3	12.7
	σ	5.66	5.12	5.79	5.29	5.73	5.36	5.61	3.17	5.06	5.53	4.27	3.46	3.98
野球	M	10.9	13.1	9.7	10.5	13.9	16.2	12.3	8.5	9.4	9.0	8.6	13.4	12.2
	σ	4.48	4.47	5.88	5.29	4.78	4.28	4.47	3.43	4.99	5.57	4.56	4.48	4.92
庭球	M	11.8	11.7	10.6	11.9	12.5	15.9	14.0	9.0	11.0	11.0	9.5	14.0	13.3
	σ	5.24	4.44	5.67	5.14	5.14	4.87	5.82	3.42	5.31	6.07	4.69	3.93	5.49
ラグビー	M	8.9	14.5	8.9	10.1	15.9	16.7	10.9	8.6	9.1	7.5	7.8	14.8	9.8
	σ	6.42	5.15	6.32	4.24	5.53	3.63	4.52	2.69	5.70	5.12	4.26	3.41	4.83
ピンポン	M	12.0	12.6	10.1	11.1	12.0	14.2	12.9	8.3	10.2	11.5	9.1	12.8	12.3
	σ	5.72	4.73	4.86	5.19	4.21	4.33	6.42	3.27	5.63	5.97	4.54	3.79	5.04
サッカー	M	12.1	11.7	11.6	12.0	12.3	14.8	13.9	10.1	11.3	8.3	10.9	13.4	14.6
	σ	4.26	5.76	3.89	4.37	3.48	3.02	3.99	1.73	5.53	3.73	4.43	3.13	3.50
バドミントン	M	11.3	11.8	11.4	13.4	14.3	15.5	13.0	9.4	13.0	13.0	10.6	15.3	15.5
	σ	4.37	3.64	5.49	5.90	5.72	4.71	4.88	3.27	5.83	5.86	4.63	3.81	5.26
陸上競技	M	10.4	11.9	10.2	10.4	13.0	16.0	10.6	8.0	8.1	8.6	8.0	14.5	12.9
	σ	5.99	4.70	5.83	5.65	5.83	4.58	5.65	3.14	6.07	5.08	4.51	4.38	5.49
体操	M	14.9	10.3	12.3	12.3	12.7	12.7	17.4	9.4	12.3	11.3	10.3	12.1	14.3
	σ	6.47	4.81	3.99	4.79	5.29	4.47	4.33	2.17	4.17	6.83	4.99	4.36	3.68
水上競技	M	13.3	12.1	12.7	15.3	12.6	13.6	13.8	10.4	10.8	13.1	13.0	15.3	14.4
	σ	5.75	4.51	5.71	4.21	3.31	5.23	5.82	3.56	5.48	4.45	5.22	3.95	4.88
剣道	M	12.3	15.5	10.4	11.4	10.7	14.8	13.6	9.4	10.5	12.2	8.5	13.6	12.2
	σ	6.22	6.73	4.99	6.15	4.10	5.93	5.96	2.71	5.80	6.81	4.84	4.15	4.25
柔道	M	11.5	14.0	9.8	10.7	14.8	16.7	12.2	10.2	9.0	7.8	7.8	13.4	12.9
	σ	4.8	5.37	5.82	4.14	4.63	4.42	4.98	2.52	5.93	5.03	3.42	3.82	3.77
空手	M	10.2	14.2	10.1	10.8	12.4	15.5	12.8	10.0	8.2	9.1	8.3	14.5	12.4
	σ	3.96	4.17	5.07	4.42	4.08	5.37	4.29	4.06	4.48	4.57	5.28	3.76	4.92
拳斗	M	5.7	10.9	11.0	10.5	14.4	18.6	9.2	9.3	7.2	8.7	8.7	16.6	14.0
	σ	4.55	4.74	7.49	5.46	2.49	4.19	4.80	3.59	5.62	6.57	5.53	2.90	6.46
ヨット	M	8.2	12.0	10.3	12.2	13.6	14.8	11.6	8.2	9.6	8.9	10.3	15.1	13.5
	σ	4.16	2.30	4.63	4.34	4.89	3.80	5.16	2.30	6.77	5.57	4.34	3.62	4.42
ボート	M	10.8	11.4	12.0	9.6	13.0	14.9	12.5	8.2	10.3	9.3	10.1	13.9	13.4
	σ	4.37	4.42	5.22	5.10	4.05	5.17	5.23	3.56	5.73	4.45	3.72	3.39	4.08
航空	M	12.1	12.9	11.1	11.1	11.9	13.2	13.1	10.6	11.1	8.4	9.6	13.3	12.2
	σ	5.76	5.81	5.23	5.67	5.00	4.46	5.36	3.05	4.83	4.33	4.56	3.31	4.91
山岳	M	8.6	12.9	9.5	12.7	15.3	14.0	13.6	9.9	11.8	10.5	11.0	14.0	13.6
	σ	5.24	3.72	6.82	4.99	3.75	3.92	5.95	3.99	6.22	5.98	4.87	4.54	4.65

平 均 値 (グループ別)

グループ	特性	S	T	D	E	R	G	L	M	I	N	P	A	F
G ₁	156	10.4	12.6	10.4	10.7	13.7	15.4	12.7	8.9	9.7	9.4	9.3	14.2	12.7
G ₂	68	10.7	14.2	8.7	10.9	12.7	15.9	12.2	9.8	9.0	9.7	8.3	14.1	12.6
G ₃	126	11.7	11.8	10.7	12.1	12.8	15.6	13.7	9.0	11.3	11.5	9.7	14.1	14.4
G ₄	67	12.0	11.7	11.3	12.3	12.8	14.7	12.7	9.0	9.6	10.5	10.0	14.4	13.6

G₁ = バレーボール, バスケットボール, ラグビー, サッカーG₂ = 剣道, 柔道, 空手, ボクシングG₃ = テニス, ビンボン, バドミントンG₄ = 陸上競技, 水上競技, 体操

文 献

- 1) Kretschmer, E., 1948 Körperbau und Charakter.
- 高良武久 1953 性格学
- 2) Heath, C.R., 1945: What people are; A Study of normal young men.
- 3) Woods, W.L. et al 1943: Selection of officer candidates.
- 4) Downey, J.E., 1932: The will temperament and its testing.
- 桐原葆見 1944 精神測定
- 5) Doust, J.W.L., 1952: The psychiatric aspect of somatic immunity; The differential incidence of physical disease in the histories of psychiatric patients. Brit. J. Soc. Med. 6, 49~67.
- 6) Sheldon, W.H., 1942: The varieties of temperament.
- 7) Johnson W.R., et al 1955: Effects of a combative sports upon personality dynamics as measured by a projective test.
- Research Quarterly, Vol. 26, No. 1
- 8) Staton, W.M., et al 1955: Measurable traits of personality and incidence of somatic illness among college students. Research Quarterly, Vol. 26 No. 2
- 9) Biddulph, L.G., 1954: Athletic achievement and the personal and social adjustment of high school boy.

Research Quarterly, Vol. 25 No. 1

- 10) La PlacI, J.P., 1954: Personality and its relationship to success in professional baseball.
- Research Quarterly, Vol. 25 No. 3
- 11) Weber, R.J., 1953: Relationship of physical fitness to success in college and to personality.
- Research quarterly, Vol. 24 No. 4
- 12) 松田岩男 1953 保健体育の心理: 運動選手の心理
- 13) 野口義之 1951 高等学校運動選手の性格特性について, 体育学研究 Vol. 1, No. 2
- 1954 運動部集団について: 女子運動選手の向性と性度, 九州大学体育学研究 Vol. 1, No. 3
- 1954 運動選手と性格, 教育と医学 Vol. 2, No. 10
- 14) 外林大作 1955 性格の診断
- 15) 矢田部達郎 1954 性格自己診断検査の作製 京都大学文学部研究紀要
- 16) Ficke, D.W., 1949: Consistency of the factorial structure of personality rating from different sources. J. Abnorm. Soc. Psychol. 44.
- 17) Eysenk, H.J. 1953: The structure of human personality.
- 18) Cattell, R.B. 1946: Description and measurement of personality.